

# 桑名別院を支える人々①

## 桑名別院華講

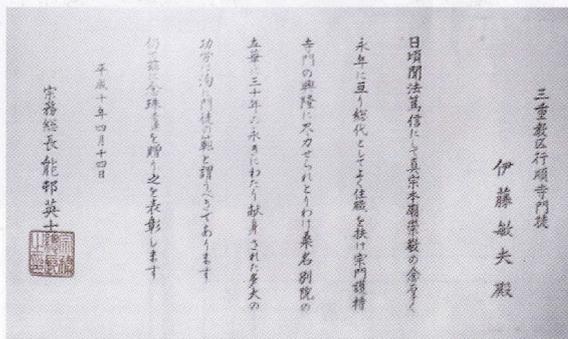
員弁組行順寺門徒

伊藤敏夫さん(八十四歳)

「歴史と伝統」は単なる言葉ではない

華講として三十年以上の長きにわたって別院の立華をつづける伊藤さん。

きっかけは昭和五十六年の別院報恩講。先輩から「手伝ってくれ」と別院に呼びだされた。ただそれだけ。それから「かれこれ三十年以上寄りつかせてもらった」と語ってくれた。



▲ 聞法篤信並びに桑名別院立華の永年に亘る功勞に対して、本山から授与された表彰状

曾祖母は歩いて山を越えてご本山にお参りに行った念仏者。祖父からは「ばあさんの筋をひいとる」と言われた。何事にも「細かく、うるさい」父親も「寺のこと」には何も言わなかった。寺と関わる事がいかにも自然だった。

寺との関わりを当然のように保ってきた環境に、歴史に裏打ちされた伝統を感じた。それは「歴史と伝統」が言葉や概念ではなく、具体的に実践されている現場と、口先だけでなく、その誇りに生きてきた人々の歩みだ。

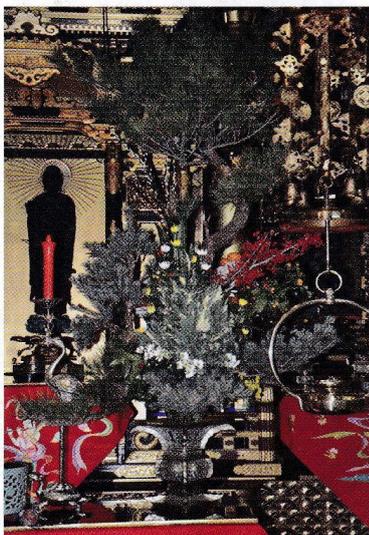
「かつて『寄せていただく』ところだった寺が、『行つたるところになつてしまつた』。今まで寺のことを当たり前のようにできる環境を整えてきてくれた歴史と

伝統の誇りが、負担にしか思わなくなつてきたことにふれて、最近「利口ななばつかりになつてしまつて、ワシみたいなバカなんがもうちよつとおつてもいい」とも。別院をお荘(かざり)りしてきたそのお姿には、自らを飾る素振りも少しもない。

華の材料も、後継者も少ない。先行きは決して明るくない。華立てやお齋(とき)に何日もかけることを当たり前にやれたことがどれだけ尊いことであつたのかを、その歴史と伝統を誇れなくなつただけに余計に強く感じる。

御遠忌に向けていただいたのは、この先、昔のとおり何でもできるといふわけにはいかないだろうが、どうか若い者が「寺に寄りついてほしい」とのメッセージだった。

それは、「歴史と伝統」といふのは言葉や概念ではなく、そこに身を置くということではないでしょうか。



▲ 桑名別院報恩講の立華